

---

## 韓国国立中央博物館所蔵通信使受贈日本金屏風の考察

鄭美娟(韓国国立中央博物館)

---

文禄・慶長の役以降、計12回にわたって派遣された朝鮮通信使は江戸幕府(1603~1868)から国書に附属する「別幅」の一つとして金屏風を贈呈された。この一群の金屏風を日本の学界では「贈朝鮮王室屏風」、略して「贈朝屏風」と呼ぶ。通信使を通じて、朝鮮国王に贈呈された金屏風はその総数が計二百点あまりに達した。しかし、現在まで確認された作品は韓国国立古宮博物館所蔵の〈芙蓉雁図屏風〉一双と〈牡丹図屏風〉一隻だけである。本発表ではそれに加えて、韓国国立中央博物館に収蔵されてきた日本屏風〈忠信吉野軍図屏風〉(徳寿2152-2)と〈春日祭図屏風〉(徳寿2152-1)および〈鎮西八郎図屏風〉(徳寿2119)の3点が、江戸幕府の贈呈した金屏風であることを新たに指摘したい。

〈忠信吉野軍図屏風〉と〈春日祭図屏風〉は第11回目(1764年)の甲申使行の時、朝鮮王室に贈呈された屏風である。狩野探林(1732~1777)が制作した〈忠信吉野軍図屏風〉は、主君の義経を吉野の僧兵の群れから救うために死も辞さない忠臣佐藤忠信のエピソードを描いた。狩野洞寿(?~1777)が制作した〈春日祭図屏風〉は、奈良の興福寺と春日大社で執り行う「春日大宮若宮御祭礼」の「お渡り式」の行事を描写した。

この2点と、従来知られた狩野梅笑(?~1808)筆〈牡丹図屏風〉(韓国国立古宮博物館所蔵)は、画家の号の末尾に「図」字を結合した署名方式、そして画家の名前を刻んだ印章が屏風の右下段に捺されるという共通点を持つ。これは甲申使行の時贈呈された金屏風を規定する重要な特徴である。

〈鎮西八郎図屏風〉は第8回辛卯使行(1711年)の折に贈呈された屏風で、狩野柳雪(1647~1712)が制作した。同屏風は、鎌倉幕府を開創した源頼朝の叔父である源為朝が自分の配流地だった九州を平定して、「鎮西八郎」という称号を得た故事を描いている。この屏風には画題の内容を解説した説明文が付されているが、これは日本の故事を知らない朝鮮人たちのために、新井白石が考案した方法で、辛卯使行時だけ取られた特別な措置であった。今は説明文の跡だけが残っているが、〈鎮西八郎図屏風〉は日本の故事に慣れていない外国人の理解を求めようと幕府が努力したことを示す現存唯一の作例である。

これら3点の作品は、それぞれ「引継ぎ」と「購入」という形で、1909年という早い時期に、韓国初の近代的博物機関である大韓帝国皇室博物館の開館とともに収蔵された。

〈忠信吉野軍図屏風〉の画題に盛り込まれた「忠」という儒教的な価値観、〈春日祭図屏風〉の画題が内包する日本特有の伝統的な社会の姿、そして源為朝という鎌倉幕府関連人物の故事を通じて武士政権という江戸幕府の体制的アイデンティティをなす〈鎮西八郎図屏風〉は、幕府が朝鮮に贈呈した金屏風に委託した政治、外交、文化的メッセージを分析するのに重要な手がかりを提供している。